

## 次の犠牲者生む前に

標題は毎日新聞 5 月 30 日夕刊の青木理「理の眼」。同感するところが多いので、記憶を記録するためにも紹介しておきたい。



森友や加計学園問題をめぐり、いまなお「一点の曇りもない」と強弁する首相。では、百歩どころか一億歩くらい譲り、その強弁が正しいと仮定しましょう。そこから一体何が垣間見えるのか。

森友問題では、首相の熱心な支持者だった学園理事長が、首相やその妻との「関係」を錦の御旗とし、小学校開設をもくろみました。これに財務省や近畿財務局は振り回されたのか、首相の「ご意向」をそんたくしたのか、異例といえる国有地の格安売却に一直線。

ところが報道でこれが問題化すると、当初は理事長を評価していた首相も「しつこい人」とバッサリ。さらには「私や妻が関わっていれば首相も議員も辞める」とまで断言します。

再び大慌てなのは財務省。首相や妻の関係をうかがわせる記録を隠蔽し、破棄し、ついには公文書改ざんにまで手を染めました。また、切り捨てられた理事長は検察に逮捕、起訴され、約 300 日も勾留。近畿財務局では職員に自殺者まで出たのです。

加計問題では首相の「腹心の友」である学園理事長が、超難関の獣医学部新設をもくろみました。これもまた首相の「ご威光」を押し出し、首相も「いいね」と言っているという「虚偽」まで弄して。

ここでも首相の「ご意向」をそんたくしたのか、自らゴマスリに走ったのか、首相秘書官や内閣府幹部らが猪突猛進。文部科学省や愛媛県も「総理のご意向」「首相案件」と受けとめ、実に半世紀ぶりの学部新設を成し遂げました。しかも首相が計画を「知らなかった」と断言したから秘書官らは大わらわ、国会でも虚偽が濃厚な答弁を連発。すべては首相を守るため。

首相の強弁が正しいとすれば、途方もなく無自覚な権力者というしかありません。政治権力とは誠にすさまじく怖いもの。その絶大な権力と威光を周囲が振り回し、振り回され、結果として現れたのは荒涼たる風景です。文書や記録の隠蔽、廃棄、改ざん、見え見えのウソ、ごまかし、果ては逮捕者に自殺者。「知らなかった」「関係していない」「一点の曇りもない」と言う首相周辺は死屍累々。

もちろん僕は、首相の強弁が真実だと思いません。ただ、どちらにせよ、もはや首相をお辞めになるべきでは。あまりに無自覚な権力者の周囲で、さらなる権力の犠牲者を増やさぬためにも。

(2018 年 6 月 8 日)